A classmate is a princess knight!

姫騎士がクラスメイト！

4

【小説】EKZ
【イラスト】京沢メガネ

試し読み版

BEGINNING NOVELS

【キャラクター紹介】

Character

A classmate is a princess knight! - volume.4

ナナ
錬金術師によって造られた魔法生物。正式名称はアールマV7。

アーマーゴーレム

ディアーネ
ダークエルフ族の祭事を司る巫女。

ミクラ
魔界貴族の名家「八冥家」の最古参。

姫巫女

妖狐天仙

異界機士

女戦士

シエラ
弓使いにして精霊術師のエルフ。そして巨乳。

魔貴族

メイド法術師

王女

精霊弓士

勇者

姫騎士

魔隷術師

狂公女

セレスタ
システィ様を守る女騎士。キリカをライバル視している。

アメリア
ワイルドな赤毛のロングヘアが特徴的な女戦士。姉御肌。

リルナ
トオルの元クラスメート。見た目と口調もギャル風だが…!?

トオル
元の世界では空気のような地味な学生。だが今、他人を言いなりにできる職業「魔隷術師」をゲット!

フラミア
八冥家イヴリースの実妹。狂公女と怖れられるほど強大な魔力を持つ。

パルミューラ
第四位階に位置する魔貴族。漆黒のコスプレドレスを纏う悪魔っ娘。

ニーナ
小柄で細身の女法術師。ロリ担当。

システィナ
キリカが仕えるお姫様。ランバディア王国の第三王女。

キリカ
トオルのクラスメートにしてクラス委員長。異世界でランバディア王国の姫騎士となる。

A classmate is a princess knight! - volume.4

Contents

第三章　俺と、女勇者と、復活の遺跡

★13話★ リルナの決意と、心の世界 6
★14話★ 教室の記憶と、勇者のおっぱい 23
★15話★ 俺とリルナと、舞い降りる戦女神 40
★16話★ オルトの誤算と、乙女の帰還 62
★17話★ 魔卿の訪れと、突入者たち 78
★18話★ キリカのレッスンと、三人の唇 97
★19話★ 次元起爆と、詰みの一手 114
★20話★ 『魔隷術師』と、天穿つ光 130
★21話★ 変貌の魔腕と、ナナの悲願 156
★22話★ キリカとリルナの、おっぱい天国 180
★23話★ 二度目の初めてと、管理者三たび 201
★24話★ ふたつの故郷と、ふたつの月 219

第四章　俺と、八冥家と、魔界騒乱

★1話★ 新たなる冥家と、集う巨頭 237
★2話★ 万魔殿の混乱と、沈黙の正体 252
★3話★ 思わぬ再会と、媚処女蹂躙 261
★間幕★ 村娘たち、その真実 278
★EX-Hシーン★ 俺と、キリカと、制服再び 292
★ボーナストラック★ 俺たちと、魔貴族トリオと、コスプレと 315

13話：リルナの決意と、心の世界

「お願いがあるんだ、トオルっち！」
魔気船のキャビンに入ってくるや、俺に決意の表情を向けてくるリルナ。
柔らかそうな頬には、うっすら乾いた涙のあとがある。
どうやら、さっきのシスティナ姫との会話を聞かれていたらしい。
「……まさかとは思うが、そのお願いってのは。破天の骸を自分と融合させろ、って言い出すつもりじゃないだろうな、橘さん？」
「うん、そうだよ」
こともなげに頷く、サイドテールのギャル勇者。
予想はしないでもなかったが、俺をズキズキと頭痛が襲った。
くそ……突っ込み所がありすぎてどこから突っ込めばいいんだ。
「あのな、聞いてたんなら危険性も理解できるよな？　破天の骸に体を侵蝕された君を、俺が骸の方を隷属させることで間接的に隷属術式を成立させたとして……そこまで深く融合した骸が、どんな悪影響を心身におよぼすかわからないんだぞ」
破天の骸は魔王の骸、その力そのもの。いくら勇者といえども、無事ではいられないだろう。
隷属云々以前に、心をこっぱみじんに壊される可能性だってゼロじゃない。
いや……それよりも、そもそもだ。

「橘さん、君はどうして俺の隷属術式にかけられること前提で話してるんだ？　俺の、奴隷になるってことだぞ？」
システィナ姫みたいに惚れてるってんならともかく、正気の沙汰じゃない。
しかも勇者として悪と戦う道を選んだ彼女にとっちゃ、邪悪な魔術師の手駒になるなんて一番耐えられないことじゃあないのか？
「だって、それしか方法ないっしょ？　あのでっかい巨人……オルトを止めるには、さ」
表情を変えぬまま魔気船の窓から、ちらりと眼下の光景……浮遊岩塊から出現した全長１kmにおよぶ巨人が生み出した、晶片獣（シャードビースト）の群れに蹂躙されるパラヴァータの街を見やるリルナ。
なるほど、そういうことか。
「勇者としての責任感、それとも相棒の真意を見抜けずこの事態を招いた罪悪感ってとこか？　橘さん、ずいぶんと自暴自棄なんだな」
「トオル様……」
なぜだか俺の声は苛立っていた。システィナ姫が心配するほどに。
冷静に考えれば、ああまで隷属の手段を模索していたリルナが自分から隷属の道を選んでくれるのだから、止めずにそうさせればいいようなものだが……どうしても、言葉が先に出てしまう。
「それで後先考えずに俺の魔隷になって、骸やオルトと心中したいと？　そいつは安っぽい自己満足以外の何ものでもないな。何が勇者だ、がっかりだよ」
「……違うんだよ、トオルっち」
「何が違うって？」

リルナは決意の視線のまま、俺に向かって一歩、踏み込んで来た。
そして、だしぬけに明るいサイドテールと大きな胸を揺らしてにっこりと笑う。
それは自暴自棄になった人間の顔ではなかった。
「そりゃ、骸ってのを体にくっつけるのはヤバい賭けかもだけどさ。でも……トオルっちの、その、魔隷？　そっちになる方は、ヤケとか考えなしに決めたわけじゃないよ。アタシなりに考えに考えた結果だもん」
「それはどういう……」
「トオルっちなら。アタシの、勇者の力を使いこなしてくれるって思ったから」
俺の目を、大きな澄んだ瞳でまっすぐ見つめながら、そう断言された。
「……正気なのか、橘さん？　俺は君が思っているような――――」
「イイ人じゃない、って？　そうかな？　トオルっちこそ、ジブンのことあんましよくわかってないんじゃない？　人間そーゆーもんだよ」
「な……」
至近距離から瞳の奥、心の中まで見通すような視線で言われ、思わず返答に窮してしまう。
「トオルっちは頭の回転早くて冷静で、周りのコトと今すべきコトが見えてるヒトだと思う。少なくともアタシ自身よりはね」
「俺が……？」
「うん。アタシは、オルトが本当に考えてることを理解できなかった。ずっと一緒にいたのに、気付けなかった。それでこんなことになっちゃった」

寂しそうな表情で微笑むギャル勇者。
なるほど、俺は昔からリルナを、才能とセンスで何でもこなしてしまう完璧超人だと思っていたが……。
他者の心の機微を読むことにかけては、確かにその天才性が、特異すぎる人格が逆に邪魔をしてしまうものなのかもしれない。
「アタシ一人だと、多分またこんな間違いをやっちゃう。だから勇者の力をコントロールしてくれるヒトが必要なんだ。今度のことでそれを痛感したんだよね……そういえば前、オルトにも勇者はその力を正しく律するギムがあるとか言われたよ」
魔王に唯一対抗しうる勇者という、強大すぎる力に伴う絶大な責任。
精神面がそれにはまだ未熟だという自己認識は、確かに的を射た考え方かもしれない。
だが、だからといって。
「でも、だからって俺の魔隷になるってのは飛躍してないか？　勇者の力をどう悪用するかわかったもんじゃないぞ？」
「トオルっちなら、信じられるよ」
「何を根拠に――――！」
わかったふうな口を聞くリルナに、俺の苛立ちが加速する。
俺のいったい何を知っているというんだ。
俺の正体を知ってなお、なぜそんな無邪気な目を向けられるんだ。
「あるよ、根拠なら。トオルっちは覚えてないかもしれないケドさ、昔……アタシはトオルっちに

勇気と夢をもらったんだよ」
「……勇気と、夢？」
少し遠い目をするリルナ。
なんだろう、おぼろげに記憶の中に何かが……引っかかってるような。
「あはっ、やっぱ覚えてないか……まあ、トオルっちにとっちゃ大したことじゃなかったかもだしね。でも、アタシには十分な理由があるってコト」
「……もし過去の何かが根拠だとして。こっちの世界に来た俺が変わったとは考えないのか？　魔隷術師という絶大な力を手にした俺が」
「ん～……変わってる部分もそりゃあると思うケド、根っこは変わってないと思うよ。遺跡で姫っちと話したり、ドアの外でさっきの話聞いてたりして、そう思ったもん」
結論先にありきで目が曇っているとか、俺に過剰な期待を抱いて楽観視しているとかとは、どうやら少し違っていた。
リルナの声音には、不思議な確信の響きがあった。
「それにね。もし、本当にアタシの見立てが間違ってて、本当にトオルっちがすっごい悪いヤツだったら……」
「だったら？」
「その時は、トオルっちをぶちのめす！」
「……は？　いや、だって隷属魔法が……」
何を言ってるんだと真顔になる俺に、リルナは大輪のひまわりのような笑みで答えた。

「そんなん、気合と根性でなんとかしちゃうよ！　だってアタシ……勇者だもんねっ！」
どん、と胸を叩いて――巨乳のせいで効果音はむしろ「ぽゆん」だが――リルナは根拠のない自信を自信たっぷりに断言した。
ぽかんと、あっけにとられる俺。
「ふふっ……うふふっ。すごいですわね、リルナさんは」
黙って話を聞いていたシスティナ姫が、レースの手袋に包まれた手の甲を上品に口に当ててころころと笑う。
つられて、俺も思わず少し噴き出してしまう。
「ははっ……なんですか姫、その『これはトオル様の負けですね』みたいな反応」
「ごめんなさいまし、そんなつもりでは。でも、彼女の言うことにも一理あると思いますわ……トオル様のご判断の正しさは、わたくしも全幅の信頼を寄せているところですし」
優雅に頭を下げる金髪碧眼のお姫様。
俺は苦笑を返し、リルナに向き直る。
「わかった、根負けしたよ、橘さん」
「!!　それじゃあ！」
まったく、本来ならムリヤリ隷属させたがってた側のはずの俺が、根負けして隷属させることを受け入れるとはね……変な話もあったもんだ。
橘リルナという女の子に関わると、どうもやっぱりペースが乱されていけない。
だが……今はそれが、不思議とそう嫌ではなかった。

「いいだろう、君を魔隷にしてあのオルトを止める作戦、やってみるとするさ。でも……骸をそのまま使うってのはやっぱりナシだ」
「えっ⁉　で、でもそれじゃ――――」
どうやって隷属術式を成立させるのか、と。もっともな疑問だ。
だが、俺にはさっき、会話の中でひとつのアイデアが閃いていた。
ヒントは、何気ないリルナの言葉。
「その前に、試す価値のある方法がひとつある。協力してくれるよな、橘さん」

※　※　※

「夢界仙境……？」
「ああ。知らない橘さんにも簡単に説明しとくと、寝ている間に見る夢と夢とが繋がった世界だと思ってくれ」
あらためて作戦の説明を開始する俺。
聞いているのはリルナとシスティナ姫、そしてこの計画に必要な人員として呼んできたダークエルフの姫巫女、盲目のディアーネだ。
「へぇ～！　そんなんあるんだ！」
「確か、トオル殿に接触してきた大魔族が支配する場所ですね。それがどう関係するのでしょう？」
「いいか？　夢の中は精神の世界。つまり、現世に置いてきた肉体はそこでは無関係になる……ということは、だ」
「……あっ！」

聡明な姫が真っ先に、はっと気付いた。
「そこならば、リルナさんの体に備わった魔法反射能力も無効になる……と？」
「えっとつまり、夢の中でトオルっちがアタシに魔法をかけるってこと⁉　うわ、ファンタジーっ！」
何を今さら、ここはファンタジー世界だ。
そう、これこそがさっきリルナの口から出た〝夢〟というキーワードから連想した一発逆転のアイデア。
「しかしいくつか問題があるように思えます、トオル殿。まず、その夢世界でも隷属術式は有効なのですか？」
「ああディアーネ、それなら問題ない。世界を作った張本人から確認済みだ」
ミクラとのエッチ勝負の際、精神的に相手を負かした状態ならここでミクラを隷属させられるのでは――という推測を彼女自身が肯定しているからな。
「なるほど、ではもうひとつ……トオル殿とリルナ殿が、いわば〝同じ夢〟の中に入ることは可能なのですか？」
「そう、問題はそこだ。だからディアーネ、あなたの力が必要なのさ」
「私の……？」
いぶかしむ褐色の巫女に、俺は推論を語った。
彼女が視力と引き換えに持つ、超常的な感応能力。超自然の知覚力。
それは破天の骸に侵蝕された際にも、その中に潜む魔王の残滓らしき意志を探り当て、おぼろげ

に感じ取ったほどだった。
「ディアーネには、いわばレーダーというかソナーの役をやってもらう」
「れ、れーだー？　そなー？」
「トオルっち、地球じゃないとこのヒトにそれ通じないと思う」
「おっと。まあ、探知機というか探査役というか……とにかく、まずディアーネにはあらためて俺の隷属術式をかける。それで俺との間に魔隷としての繋がりができるはずだ」
命令や指示を出す際に用いられる、精神同士の経路（パス）。
それを辿れば、おそらく夢の世界で俺とディアーネの意識が〝合流〟できるはずだ。
「そして、ディアーネには現実世界でリルナに触れて、その意識の場所を超感覚で〝探って〟ほしい。そして夢界の中で俺の意識を、彼女の意識の方へと導いてほしいんだ」
「まあ、そんなことが可能なのですか⁉」
「そ、そのような力の使い方をしたことはないので、上手くいくかどうか……！」
むろん、可能だという保証はどこにもない。
すべては〝できるかも〟という仮定に仮定を重ねた、針の穴に糸を通すような賭けでしかない。
それでも、最初から諦めるよりはマシだ。
「いいじゃん、ダメモトだよ！　それでほんとにダメなら、アタシが骸を使う方をやればいいんだしさ」
「おいおい……そっちをさせないために出したアイデアなんだけどな」
「あう。ごめん、トオルっち」

リルナに突っ込みを入れつつ、ちらりと眼下のパラヴァータを見やる。
いまだ動かない遺跡の巨人は、明らかに何らかの力をチャージしている最中だ。
それを完了させてしまえば、おそらく俺たちの勝ち目は本当に消えるだろうという予感があった。
「時間がない、さっそく取りかかろう。キリカたちには姫から伝えてくれ――――さあ、ミッションスタートだ！」

※　※　※

不気味な沈黙を保つ、全長１kmにおよばんとする遺跡巨人……その中枢部。
そこには透明な水晶でできた巨大な砂時計のような物体が、謎の金属に覆われた天井と床を繋ぐようにして鎮座している。
その、砂が落ちるもっとも細い部分にあたる場所には、うっすら発光する緑色の球体が浮かんでいた。
オルトのコア。
ナナと同型のスペアボディを捨て、直接遺跡の心臓部……同じ異世界より送り込まれた機動兵器の中枢プラントと融合しているのだ。
今や、巨人はオルトの体そのものとなっていた。
〈プラント修復率89・2％、全防衛機能正常稼働中。エネルギー充填率現状73・6％、毎分＋1・2％で安定――――〝破天の骸〟を触媒として取り込んだのは正解でしたね〉
機械的な抑揚のない声がそこから響く。
遺跡深部に存在した破天の骸の欠片は、すでにこのプラントと一体化している。

その支配力で晶片獣（シャードビースト）を操り、命令を下しているのだ。
本来、次元を超えてオルトたちの世界にも悪影響をおよぼしたそれらを消滅させるのが造られた理由のはずだが、今は敵の力を利用することにためらいはないようだった。
〈もうすぐです。永い永い無為の時を経て、もうすぐ私たちの悲願が現実となります。我が〝姉〟――アールマ・ヴァルキュリア・Ⅶよ〉
オルトが声をかけた先には、金属の台座に安置された赤い球体。
トオルから奪った、ナナの中枢コアだ。
〈あなたにも新たな〝体〟を与えましょう。このプラントに遺された、最強の駆逐兵器ユニットを〉
音もなく床が開き、そこから何かがせり上がってくる。
人間大の何かが。
〈目的完遂までの余興です。本来の使命に戻れず、人間の術師ごときの走狗として使われた……そう、彼らの表現を借りるなら〝屈辱〟が妥当でしょうか？　その意趣返し、新たなボディで存分に晴らすとよいでしょう――〉
あくまで機械的な、非人間的な声音。
だが、誰も聞いていないはずなのにあえて喋るという非効率的な行為を含めて、そこには何らかの感情の色が宿っているかのようだった。

※　※　※

「……どうやら、第一段階はクリアみたいだな」
足のくるぶしまでを澄んだ水が濡らす、川のせせらぎの中に俺は立っていた。

視界の果てまで川は広がり、頭上には抜けるような青空。
紛れもなくここは夢界仙境。
八冥家最古参の実力者、〝妖狐天仙〟ミクラが支配する夢の精神世界だ。
「まずはここに俺が来れなきゃ話が始まらなかったが……やっぱりこれのおかげか」
手に巻かれた勾玉を紐で束ねた腕輪、現実世界でも身につけていたミクラからの贈り物を見やる。
込められた魔力はオルトの攻撃を防ぐ際に使い果たしたが、やはりミクラと何らかの霊的な繋がりを有していたようだ。
『トオル殿……私の声が聞こえますか？』
見上げれば、半透明になったディアーネが俺の肩の上あたりに漂っている。
精霊か女神の類いみたいで、いつもに増して神秘的だ。
「ああ、聞こえるよディアーネ。これで第二段階もクリアっと……ところで、ひょっとしてその目」
『ええ。ここなら、肉体の束縛を受けずに精神そのもので〝視る〟ことができるようです』
いつも閉ざされていたダークエルフの瞼が、うっすら開いてこっちに微笑みかけてくる。
『なるほど……トオル殿はそのような顔かたちを……』
「えっと、ガン見されるとちょっと恥ずかしいんだが」
『あ！　す、すみません、シエラからだいたいの所は聞いていたのですがつい気になっ……い、いえ、なんでもありませんっ』
半透明だからよくわからないが、どうやら赤面して慌てているらしく長いエルフ耳がぴこぴこ跳ねた。

さて、ともあれ次が正念場。リルナの意識との合流だが……その前に。
「てわけで、いるんだろう？　妖狐天仙サマ」
「あらぁ……やっぱり気付いていたのねぇ、坊や」
虚空に呼びかけるや、清流が渦巻き、豊満な体を和服に包んだ狐耳の金髪美女が出現した。
『こ、この方が……っ』
「ええ、ミクラよぉ。初めましてね、ダークエルフの姫巫女サマ」
もふもふした九尾をクッションにして空中に腰掛け、艶然と笑う。
やはり、俺たちの表層意識を通して現状を把握しているようだ。
説明は不要だが、隠し事もできない。
「まさか、そんな手を思いつくなんてねェ。ワタシはてっきり、破天の骸を通してあの勇者ちゃんを隷属させる方を選ぶと思ってたわぁ」
「見込み違いで悪かったな。あんたのことだ、リルナの心が骸に砕かれて勇者としての成長がそこで止まれば、魔界の潜在的脅威がひとつ減る……とでも考えたんじゃないのか？」
俺の指摘に、着物の袖で口元を隠し、くすくすと笑う狐耳魔貴族。
その表情は読めない。
「あらぁん、心外ねぇ坊や。ワタシがそんな怖ぁいこと勧めるように見えるのかしらぁ？」
「どうだかな。ともあれ、これから俺のすることを邪魔しないでくれよ」
「もしイヤだと言ったら？　普通の方法なら引きずり込めなかった勇者ちゃんが、坊やの策で夢界に来たからと……これ幸い、あのコの精神を砕きにかかるチャンスかもしれないわよぉ？」

『なっ……!?』
相変わらず口元を隠したまま、すっと目を細めるミクラ。
だが、ディアーネと違って俺はその程度で揺さぶられなどしない。
「つまんないハッタリはやめてくれ。用心のために、眠っている俺たちの体に異変が起きたら物理的に叩き起こすようにと、起きてる皆に伝えてある」
念のための保険。だが、おそらくそれは不要だろうと俺は考えている。
「第一そんなことがもし可能だとして、俺を完全に敵に回す愚を慎重派のあんたが冒すとは思えない。むしろ勇者の力を魔界と戦う気がない俺がコントロール下に置けるなら、その方が安全だと考えてるんじゃないか？」
「……ふふ。やっぱり坊やは聡いわねぇ。面白いわぁ、なら好きにやってみなさいな」
優雅に手のキセルをひと振りすると、川の向こうに濃い霧のようなもやが立ちこめる。
「あの先が、他者の夢との境界線よ。その姫巫女サマの感応力なら、確かにあの先の膨大な領域から勇者ちゃんの精神世界を探し当てることができるかもしれないわねぇ」
それは喩えるなら、インターネットから乏しい情報を頼りにたったひとつのウェブページを探し当てるような所行。
検索エンジンにあたるのがディアーネの力というわけだ。
「言われなくてもやってみるさ。行くぞ、ディアーネ」
「んふふ、期待してるわぁ。このまま坊やがやられちゃったら、えっち勝負の決着を今度こそつけることもできなくなっちゃうものねぇ」

『はい、トオル殿……って、えっっ⁉』
もやをくぐる直前で、大いに乱れるディアーネの意識。
なんでこのタイミングでそれを言うんだよ、と内心でぼやきつつ。
俺は、ひらひら手を振るミクラに見送られながら、霧のような境界面に踏み込んでゆくのだった――。

※　※　※

数分、数時間、あるいは数日……ことによるともっと長く。
俺とディアーネは、乳白色の霧の中をさまよい続けた。
夢がそうであるのと同じで、夢界仙境でどれほどの時が過ぎても現実世界のそれはほとんど経過しない。
その意味では、オルトの本格的攻勢に間に合わなくなる危険はおそらくない。
だが、体感時間に比例して精神は当然、疲弊する。
俺かディアーネのどちらかが限界を迎えればそれで終わりだ。特に、リルナの意識を捉えるために集中し続けているディアーネの消耗は大きいだろう。
その意味で、チャンスはこの一度しかない。
『トオル殿……！　あれを……！』
疲労を隠せない声が、だがはっきりと告げた。
周囲を包む霧の先に、薄ぼんやりと光る空間が現れる。
「あれが……リルナの精神世界？」

『はい、おそらくは……そして、申し訳ありません……私は、ここまでのようです……後は、お一人で……っ』

浮遊するディアーネの姿がいっそう透け、どんどん消えて行く。

消耗しきった意識が、夢も見ない深い眠りの中に沈んでいこうとしているんだろう。

「ありがとうな、ディアーネ。よく探し当ててくれた、ゆっくり休んでくれ……終わったらご褒美に、好きな体位で思いっきりセックスしてやるよ」

『なっ……そんなこと言われたら……眠れなく……なるじゃ……ないですか……っ』

盛大に恥ずかしがる反応を残して、ディアーネの意識が離れてゆく。

俺はそれを見届けると、眼前の光の中へと意を決し飛び込んだ。

※　※　※

「ここは……？」

到達した先に広がっていたのは、見覚えのある景色だった。

整然と並んだ勉強机、日直の名前が書かれた黒板。窓の外には夕焼けのグラウンド。

といっても高校のそれではない。

確かこれは、俺が中学生の時の教室だったか。

「待ってたよ、トオルっち」

振り返る。

そこには、リルナがいた――――セーラー服に身を包む彼女が。

髪は地味なお下げの形に結んでおり、色も今の明るいそれではなく真っ黒。

美貌をより煌びやかに見せるネイルやアクセサリーの類いは何も身につけていない。
一見とても、どこにいても輝きを内から放ち、人の目を惹き付けてやまないあのリルナだとは思えない姿。
（そうか……思い出した）
これが、中学生の頃の。
俺が初めて会った頃の、橘リルナという女の子だったのだ。

14話：教室の記憶と、勇者のおっぱい

思い出した。

リルナはあの時――ここで。

この無人の教室で、泣いていたのだ。

『あ……小田森（おだもり）、くん』

放課後、忘れ物を取りに来た俺の方を振り向いたセーラー服の少女。

その頬を伝う涙が、夕焼けの逆光できらめいた。

なぜ彼女が泣いていたのかはわからない。

当時の橘リルナはごく普通の目立たない地味な少女で、もちろん俺と彼女にクラスメートだという以外の接点などなかった。

イジメられていたのかもしれない。

家庭の問題か何かだったのかもしれない。

あるいはもっと、思春期の少女にありがちなくだらない理由だったのかもしれない。

いずれにせよ、俺には知る由もない理由で流された無関係な涙だった。

そのはずだった。

『お……俺、忘れ物取りに来ただけだから……』

気まずさを覚え、言葉少なに用事を済ませ教室を出ようとした俺に。

何を思ったかリルナは、か細い声でこう言った。
なぜだか俺に問うたのだ。
『……なんで、こうだったらいいなってふうに生きてけないんだろうね』
その言葉を聞いた時、どうしてあんなことを答えたのかはわからない。
だが、悲しみと諦めの混じったその声に、気付けば反射的に言葉を返していた。
『それは……やる前から諦めてるからじゃないのかな？』
『え――――』
女の子とまともに話す機会自体ほぼなかった俺が、どうしてそうはっきり言えたのかは今考えても不思議だ。
ただ、その時は自分でも驚くほど自然に、言葉がこぼれていた。
『こうだといいなっていう目標みたいなものが、見えてるんならさ。そこめがけて何か……何でもやってみたらいいんじゃないの。よく、わかんないけどさ』
『小田森くん……』
それはもしかしたら、ずっと俺自身の心に渦巻いていた考えだったからかもしれない。
俺の方こそ、そうありたかっただけかもしれない。
自分には目標すらなかったから、そんな自分よりはまだマシだろうと苛立ったのかもしれない。
『好きにやってみて、それでもダメだったら本当にダメなんだろうけど。でも……どうせダメだろって考えに最初から縛られてるよりは何かしたぶん、マシな気持ちになれるんじゃないの』
『縛られてる……よりは……？』

って、何を言ってるんだ俺は……と、我に返ってそそくさと教室を出た覚えがある。
今思えば、自分ができてすらいないことをよくもまあ偉そうに言ったもんだ。
だがリルナはそんな俺の言葉を、どこか真剣な面持ちで神妙に聞いていたようだった。
それからすぐクラス替えがあって、俺と彼女の接点はますますなくなったが、同時に彼女は少しずつ〝変わって〟いった。
自己主張が増え、笑うことが増え、友達が増え、声が大きくなった。
そして高校で再会した時は、一瞬誰だかわからないほどの天真爛漫ギャルが誕生していたというわけだ。
『やっほー！　トオルっち、ひっさしぶりーっ！』

※　※　※

「思い出した……？　思い出して、くれた？」
いつの間にか、背景の教室は中学のそれから高校のそれへと。
そしてリルナの外見も、現在のギャル勇者としてのものへと変わっていた。
ただ、ぱっちりした瞳だけが、あの時見た涙と同じ色でうっすらと濡れていて……そのひかえめな声は一瞬、どちらかというと中学生の頃の彼女のようでもあった。
「ああ……うん。いや……不意打ちで黒歴史ノートを見せられたみたいで、なんか恥ずかしいな」
「へへへ。恥ずいのはアタシも同じだよー」
首をこてんっとかしげて、にかっと笑うリルナ。
夕焼けに照らされたサイドテールが、茜色に光る。

「……アタシはあの時ね。トオルっちに夢をもらったんだよ。なりたい自分になれるんだって、自分の好きな自分になっていいんだって……背中を押してもらったんだ」
「俺は……何もしてないよ。それは橘さんが自分で勝ち取ったものだ」
何気ない俺のひと言はきっかけに過ぎない。
俺が言わなくても、賢いリルナは誰かの言葉から同じヒントを見出したかもしれない。
第一同じことを言われても、それを自己実現の支えにできるかどうかなんて当人の資質次第だ。
「そうかもしんない。それでも、アタシのきっかけは他の誰でもないトオルっちの言葉だったんだ。だから、アタシはトオルっちなら信じられるし――――信じたい」
リルナは一歩を詰めて、半歩離れた正面に立って俺を見つめた。
どこまでもまっすぐな瞳。
「だから、この世界でそのことを……伝えられてよかったよ。トオルっちに、思い出してもらえてよかったよ」
うっすらはにかんだ、女の子らしい表情。
思わずドキっとさせられ、目をそらしてしまう。
「あ……ひょっとしてあの時のことが理由で橘さんは、高校で時々俺に声というかちょっかいというか、かけてきてたのか？」
「あっうん、そだよ。でもトオルっち、フキゲンそーっていうかイヤそーにしてたから途中から自重したケド」
「……当たり前だ」

俺にとっては、リア充が気まぐれで余計なおせっかいをしてきているとしか思えず、反応に困るしウザいと思っていたくらいだったが……。
あれは、リルナなりの恩返しというか親愛の情の表現のつもりだったのか。
やはり俺は少し、誤解していたようだった。
悩みなど何もない完璧マイペース人間に見えた橘リルナという女の子はその実、年相応に憂いや苦しみ、弱さを抱え、間違うこともある等身大の人間だったのだ。
そしてそんな面を抱える弱く不完全な自分を自覚してなお、前向きにポジティブに、目標に向かって進み続けることができる。
それが相棒だったオルトに裏切られても心折れることなく、俺の魔隷になるという大胆な決断すらできた強さの理由なのだろう。
それゆえに――――橘リルナは勇者なのだ。
「ねえ、トオルっち。アタシはオルトを止めたい。ううん、それだけじゃない……オルトと、もう一度話したいんだ」
「話す？　あいつと？」
「うん。だって結局、あの時はちゃんと聞けなかった。オルトが何をしたいかをさ。理由ってより、気持ちの方を」
オルトの目的。
それは破天の骸という脅威を根こそぎ排除すること、ただひとつのはずだ。
そのためにパラヴァータ同様、この世界の諸々を犠牲にしてでも――――それだけではないとでも

いうのか？
ただそれだけのための兵器として造られたオルトに、他に何があるというんだ？
「アタシはオルトがほんとは何考えてんのか最後までわかんなかった。だから、まだわかってない何かがあるのかもしんない。ううん、やっぱりないのかもしんない。どっちにしても、もう一回ちゃんと話さなきゃそれもわかんないまま……そんなのはイヤなんだ」
決意の表情の理由はそれか。
なるほど、だったら。
「それが、今の橘さんがしたいことってわけか。じゃあ、俺もあの時と同じ答えを返そう。好きに『何でもやってみたらいいんじゃないの』――ってね」
「トオルっち……！」
「そのための力は、魔隷となることと引き換えに俺が与えよう。あの時みたいに、俺が君の背中を押そう」
俺はリルナに、魔紋が刻まれた手を差し伸ばした。
さあ……あとは、隷属術式を完成させて契約を終えれば準備はすべて完了だ。
「あっ……う、うん……っ」
と――その時。
ふと、リルナの様子の変化に俺は気付いた。
顔を赤らめ、うつむき、ぎくしゃくと視線を泳がせ、自分の指と指を絡ませてなんだかもじもじしている。

……なんだ、この今までにない反応は？
「か……覚悟っていうか、心の準備は……できてるよっ。ていうか、その決心が一番時間かかったっていうか……と、トオルっちの前に出て行くのが一番勇気いったっていうか……っ」
「は？　準備とか勇気って、何の？」
「だ、だから！　す……『する』ことのだよっ！　だって、その……魔隷ってのになるには、必要なん……だよね？　って、はっきり言わせないでよトオルっちのばかーっ！」
真っ赤になった顔をあげて叫ぶリルナ。
俺は一瞬、ぽかんとあっけにとられたが、
（まさか……そういうことか）
……ようやく合点がいった。
どういうわけか彼女は、魔隷術師としての契約には『エッチな行為が必須』と早合点し、勘違いしているのだ。
ディアーネあたりから断片的に聞いたか、それとも……まさか、遺跡でのキリカとの行為を感付かれていたのか？
いや、今は理由なんかどうでもいい。
むしろこれは……言いくるめる手間が省けて好都合だ！
「よく決心してくれたね、橘さん。その通りだよ」
リルナの決意も過去のちょっといい話も、それとこれとは別問題、別腹。
そう、欲望のままに突き進んでこその俺だ。

それこそが俺の自分らしさ。リルナと違い、こっちに来て初めて実現できた生き方。
さあ……待ちに待ったそのわがままボディ、たっぷり味わわせてもらうとするぜ！

※　※　※

ぷちぷちとひとつずつ、ブラウスのボタンが外れる音。
ためらいがちにピンクのブラが取り去られ、そしてついに。
ぽゆんっ……と、俺の目の前にふたつの柔らかい膨らみがさらされた。
「おおっ――――！」
思わず感動の声が漏れる。
すらりと白いボディから突き出された、思った通りキリカに負けず劣らずの巨乳、いや爆乳。
それは重力に負けずツンと前を向き、なんとも挑発的な大迫力の双曲面を描いている。
まったくもって生意気でわがままな白ギャルおっぱいだ。
「あぅう、恥ずいよぉ……あ、あんまし見ないでトオルっち……」
盛大に赤面し、なんとか俺の視線から大ボリュームおっぱいを手で隠そうとするリルナ。
キリカとの初体験を思い出させる、なんとも初々しい仕草だ。
そのギャルギャルしい外見と印象のせいで、遊びまくってるという噂も少なくなかった彼女だが……この反応を見た感じ、案外処女なんじゃないかと俺は思い始めている。
「そういうわけにもいかないな。隷属術式の完成にはまず、対象の体をしっかり確認する必要があるのさ」
「ま、マジで⁉　うう～っ、そ、それじゃあ仕方ないけどさっ……」

もちろんウソ八百だが、リルナにそれを知るすべはない。
この空間なら邪魔もツッコミも入らないし、まったく好都合だ。
「ほら、手をどけてちゃんと見せてくれ。橘さんのおっぱいを」
「っっ――――！」
教室の椅子に腰掛けた俺の前に立つ彼女は、ちょうど男の顔の真正面に生おっぱいをさらすハメになる。
乳首を隠す手と俺の顔とを、ちょっと涙目になって交互に見るリルナだったが、俺が譲る気はないと理解すると、いよいよ観念して震える手をゆっくり離してゆく。
「こ……これでいい、の？」
リルナの唇とよく似た色をした薄ピンクの、子供のように初々しい綺麗な乳首。
特徴としては小さめの乳輪がぷっくりと全体的に膨らんで、はっきり突き出るようになって自己主張している。
パフィーニップルってやつか？　ただ巨乳なだけでなくなんともエロ可愛いおっぱいだ。
しかもその先端、ぽっちり飛び出た突起は緊張のせいか、すでに勃起していた。
「あ、あのさっ……アタシのおっぱい、別にっ……その、ヘンとかじゃない、よね？」
「え？　ああ、何も変なところはないと思うけど。なんで？」
「だ、だって、あんまヒカクタイショーとかないしっ……そか、ヘンじゃないなら……よかった」
「ああ、変どころか可愛いおっぱいだ。橘さんらしいよ」
「かっ……可愛いとかそーゆー違いあんの⁉　てか、アタシらしいおっぱいってイミわかんないよ

お……」
俺にまじまじ見られたせいか、シミひとつないリルナの白い肌にうっすら汗が浮かぶ。
そうしてしっとりした双丘の頂点で、恥ずかしげにふるふる震える乳首……なんとも絶景だ。
いつまで眺めていても飽きないくらいだが、もちろんそれだけではもったいない。
「さてと、じゃあ次は触って確かめさせてもらうよ」
「さ、さわ……ッ!? や、やっぱりそうなる……よね」
これ見よがしに、わきわきとイヤらしい動きで十本の指を、雄大な山脈めがけ迫らせる俺。
その仕草に怖じ気づいたのか、リルナはごくっとツバを飲み込むと、
「――あ、あのね！」
突然、何かの限界を迎えたという感じで声を張り上げた。
「どうしたの？」
「あの、その……アタシ、実はなんていうかっ……！ こ、こーゆうこと……えっち的なもんの、経験？ そういうの、実はホントになくてっ！ マジで、ぜんぜん……なくて」
途中から、しゅんと消え入りそうに細る声。
半ば予想通りの事実を、まるで言った反動で死んでしまうかのような勢いで絞り出すリルナ。
かちこちに緊張して、漫画的な記号で表現するなら目はグルグル、汗ダラダラの状態だ。
「と……トオルっちはさ。あるん……だよね？ ほかの魔隷のヒト……姫っちと、こういうこと……したんだ、よね？」
なぜかピンポイントでキリカの名を出し、ちらりと何かを訴えるかのような子犬じみた目を向け

てくる。
「ああ。まあ、そりゃもう……色々とね」
「そ、そーなんだ。す、すごいね」
一見、見るからにエッチなことに経験豊富そうなギャルＪＫと、無縁そうな元男子高校生。
元の世界なら誰が見てもそうだったろう俺たち二人の性的ヒエラルキーが、実際は完全に逆転しているという奇妙な状況。
「じゃ……じゃあ。そのっ……い、言う通りにするから。トオルっちが、リードして……く、ください」
おいおいそんなこと言っちゃっていいのかよ、と口に出したくなるくらい無防備な宣言。
外見とのギャップもあいまって、それ自体とんでもない破壊力だ。
「ああ……心配しなくても、俺がたっぷり教えてやるよ」
「……っ。よ、よろしくっ」
お許しも出たところで、隠すものひとつないギャル生乳にいよいよ手を伸ばす。
両方まとめて、ぷるぷるの柔肉に俺の指十本が……なんともいえない感触を得てむんにゅり食い込んだ。
「んぁ……ふわ、ひゃぁんっ⁉」
「おおっ、これが……これがあの、橘さんの生おっぱい触りかっ……！」
弾力はアメリアとキリカの中間あたりだろうか？
最初はやや生意気に指を押し返してくるが、ある程度力を込めると指は沈み込み、マシュマロの

ような水風船のような心地よい存在感に包まれる愉悦をたっぷりと味わえる。
それでいてしっとりきめ細かな手触りは上質のシルクめいていて、システィナ姫のロイヤルおっぱいにも負けない上品な揉み心地を提供してくれるのだ。
「これはすごい……けしからんな、マジけしからんおっぱいだ……転生せずに失われでもしていたら、全宇宙の損失になるところだった――――！」
「と、トオルっちっ、何言ってんのかワカんないよぉ!?　ひゃぁ、ふわ!?　や、ゆっ指ぃっ……つ、強く揉まなっ……ふぁわわっ!?」
根元をぎゅっと絞り上げるように強く揉み込むと、リルナの背筋がピンと弓なりに反って甘い声が漏れた。
反射的にその手が、俺の袖をぎゅっと掴んでくる。
「こら橘さん、頭の後ろで腕を組んでおくように。俺がこのおっぱいを、心ゆくまでもてあそ……あっいや、隅々まで確認する邪魔をしないように」
「ううっ、は、はいぃ……こ、これでいーの？」
言われた通り従順に、リルナはみずから手を封じて裸の上半身を俺に任せるという、無防備すぎるエロい姿勢をとる。
意外と、命令口調で断言されるのに弱い娘なのかもしれない。
……さあ、もてあそんでやる。
この生意気極まるギャルっぱいを、みっちりねっとりもてあそび尽くしてやるぞ！
「よしよし、いい子だ。じゃあ、まずはこうして……っと」

「え、ちょっ――――！　や、やだぁ⁉」
リルナが慌てるのも無理はない。
俺はそれぞれの双丘の根元に添えた手を支点に、ぶるぶるぶるっ……と激しくおっぱい肉を揺らしにかかったのだ。
面白いように揺さぶられ、互い違いに暴れる巨大なゴムマリのようにゆっさゆっさ、たゆんたぷんっと踊り回るリルナのギャル爆乳。
「やっ、お……おっぱいで遊んじゃダメぇぇ……っ⁉　お、怒るよトオルっち……って、こっ今度はなんなのぉ⁉」
間髪容れず、俺は目の前で魅惑のショーを見せる乳の谷間めがけて頭をダイブさせた。
少しひんやりした心地よい感触、そして指でさんざん味わったのと同じ極上の柔らかさが今度は顔いっぱいに密着する。
うっすら汗のにおいを至近距離で嗅ぎながら、天国のごとき圧迫感、男としての本能的な安心感に浸る俺。
さっきのは視覚、そして触覚に嗅覚と、俺は五感の限りを尽くしてリルナの乳を味わう気満々なのである。
「そのままだぞ、暴れるなよ橘さん……」
「――――ひゃうぅ⁉　んぁ、ダメっ……ま、マジでだめぇっ、そこは……っ！」
俺だけの超高級乳枕に顔を埋めたまま、俺の指はついに最大の急所――――ふたつの乳首へと狙いを定めた。

まずは、カリカリと軽く指先で引っかくように、ぷっくり浮き出た乳輪の輪郭をなぞる。
思った通り敏感なギャル乳首は、それだけで充血を始めどんどん反応する。
「ふうぁ、ッは……っ！　や、やぁうっ……な、なんでっ……！」
「何がなんで？」
聞き返しながら、さらに触れる指を増やし、それぞれ五本の指先で頂点部分……乳首先端を中心に囲んで内に外にと閉じ開きするように滑らせる。
「んぁあ、かっ顔うずめたまましゃべんないでぇ――――っ、な……なんでそんなに、トオルっち上手いのっ……ふぁぁあっっ⁉」
はぁはぁと荒くなる息を吐き、いよいよ玉の肌のあちこちに汗を浮かせ、俺からは見えないがサイドテールを尻尾みたいに振り乱して、未知の快楽に翻弄されるリルナ。
「俺が？　そうかな？」
「だ、だって段取りすっごい手慣れてるしぃっ……そっそれに、そーじゃないと、こんなに体ヘンになる説明つかないよぉ……っ！」
自慢の巨乳に秘めていた未開発の性感帯が俺の手でほぐされ、熱を注入されて、女としての自分という未知の側面を、初めて味わう快楽と共に自覚させられている。
リルナの反応が、まさに今起きているその状況を物語っていた。
艶を帯びた彼女の声に、俺もゾクゾクと征服感を覚える。
クラスの裏アイドル、あの橘リルナに、初めての男としてメスの悦びを刻んでいるのだ――――キリカと同様に、この俺が。

「そういう橘さんだって、センスがいいよ。俺の刺激を受け止めてどんどん気持ちいい感覚に変えていけてる……最初よりもおっぱい、敏感になってきてるの自分でもわかるだろ？」
「え……う、うん……っ！　わかっ……わかるカンジするっ……おっぱい熱くて、トオルっちに触られたとこ全部っ……んぅうんぁあ⁉」
くりゅっ――くりゅりゅんっ、と不意打ちで乳首をつまみ、指の腹でこすりイジメると、リルナの嬌声がさらに1オクターブ上がった。
左の乳肉を引っ張り回すように乱暴に揉み込みながら、右の乳首を一定のスピードでシゴく。
かと思えば右の乳肌をモチでもこねるようにやんわり可愛がりつつ、左の勃起乳首を指先でピンッとはじく。
ギャル勇者の処女爆乳は、俺のもたらす愛撫刺激に面白いように反応した。
「と……トオルっちってさ、や……やっぱりっ……なんていうかっ……やっぱり男のヒト、なんだねっ……！」
「ん？」
手を止めないまま顔を上げ、しばらくぶりにリルナと顔を合わせる。
眉をハの字に、目の焦点はぽぉっと揺れて、ふにゃふにゃにトロほぐれたリルナの表情。
「ゆ、指もっ……ごつごつしててっ……こうやって、女の子の体、ちゃんとエッチな気持ちにさせちゃえるんだ……って、なんかスゴいなって、思っちゃったぁ……っ」
「……何を今さら」
荒い息の下、えへへ、と笑うリルナ。

こっちが一方的に攻め立てているはずなのに、そこになんだか母性というか……女の子の余裕みたいなものを感じさせられて、俺はドキッとすると同時にちょっと複雑な気持ちになった。
むらむらと反抗心めいた男の衝動を煽られたのだ。
「じゃあ――――もっとすごいことしてやるよ」
「えっ……？　う、ウソだよね？　こ、これ以上スゴいとかアタシ困っ……ひゃあぁぁぁんッッッ!!?」
温存していたさらなる一手。
だしぬけに乳首を唇に含み、度重なる指愛撫で充血しきった乳頭を吸い立ててやったのだ。
想像以上の快楽刺激にのけぞるリルナの背を抱き寄せると、両方の乳首めがけ交互にかぶりつき、甘噛み、しゃぶり倒す。
「――――胸だけでイカせてやるよ、リルナ」
「なっ名前呼びっ……ふぁぁあ!?　ひゃぁぁあうっっ、んひぃぃっひぅぅぅぅんんっっっ!!?」
この乳感度のよさなら、不可能じゃないという自信があった。
時には軽く歯を立て、かと思えばその刺激に怯えた箇所をケアするように優しくぺろぺろ舐めて、アメとムチの刺激でリルナの敏感乳首を急ピッチ開発していく。
キリカにも使って鍛えたテクを総動員しているという事実が、同じクラスメート相手のこの状況では奇妙な興奮を呼んで、俺の下腹部を硬くすると共に愛撫にさらに熱が入る。
「んっひあ!?　ひぎっ、あふぁぁっ……だっだめっ、トオルっちっ……あ、アタシこれマジでっ、マジへんになっ……ちゃうぅぅう!?　んぁぁぁあぅぅんぅ!!?」

「ちっとも変じゃないよっ、心配するなっ……昔、あの教室で聞いた俺の言葉でそうなったみたいに、常識に縛られずに新しい世界の扉を開け、リルナっ！」
諭すようにささやきながら、思いっきりその背中を抱きかかえ。
とどめとばかりに、双乳肉を真ん中に寄せてまとめた両乳首を口に含み、イヤらしい音を立てて思いっきり吸いあげる！
「あっ――――やっあっあッッ、あぁんぁぁあっっっ――――ふぁ、ふぁぁぁぁあああぁぁあああんッッッ!!?」
ぎゅうっと俺の上半身を抱き寄せ、固く抱きしめ合いながら――――リルナは甘く長く吼えて絶頂した。
人の手によってもたらされた、ギャル勇者の盛大な初アクメ。
「あふっ、ふぁああっ……！　はぁっ、はっはぁぁっ、はぁっ……！　なに、これぇぇ……っ！　マジ、すごすぎるんだけ、どぉっ……!?」
びくびくと伝わる痙攣と密着の熱、柑橘系の爽やかな体臭に包まれつつ。
俺は彼女の体のわななきが一段落するまで、優しくその背を撫で続けていた――――。

15話：俺とリルナと、舞い降りる戦女神

「せぇぇぇぇいッッ!!　輝刃旋円輪（サークル・グラインダー）ッッ!!」

キリカの振るう煌剣アルカンシェルの刀身が、大きな円を描く回転斬りで全周を薙ぎ払う。

四足獣の姿を持つ晶片獣（シャードビースト）の一群が、甲高い音をたてて砕き散らされ水晶の破片へと変わった。

クリスタルの吹雪の中、姫騎士の黒髪が幻想的になびく。

普段は移動用に使う天翔輝円（サークル・エアリアル）を刀身から発生させることで、まるでブースターを吹かすがごとく剣を急加速させる聖騎剣技だ。

その背後では、連鎖刃（ビュートブレイド）を鞭状形態で敵一体に絡み付かせたアメリアが、ハンマー投げのように振り回してぶつけることで巨体のケンタウロス型を仕留めた。

「いい調子いい調子ぃっ！　やっぱマスターにたっぷり注いでもらうと違うぜ、なあキリカ？」

「ちょっ……あ、アメリア！　いきなり外でそんなこと言わないでよっ!?」

遠巻きに彼女らを援護している一般の冒険者や衛兵たちに聞かれはしないかと、赤面して慌てる姫騎士。

ここは遺跡巨人からあふれ出た晶片獣（シャードビースト）の大群に制圧されつつあった、遺跡都市パラヴァータの地上市街部だ。

トオルはリルナに隷属魔法をかけるため共に眠りにつく直前、システィナ姫に伝言を残して彼女たちを参戦させていた。

冒険者や衛兵たちの防衛線が今にも崩れそうになったタイミングで斬り込んだキリカたちの奮闘は、状況をギリギリで覆すに十分なものだった。
なにしろ強いだけでなく見目麗しい。士気も上がるというものだ。
「おーおー、あっちの通りでドッカンドッカンやってるのはロリ魔族コンビだな。ありゃ任せて大丈夫そうだ」
「トオルくんが近くにいないから魔力は節約しなきゃいけないのに、派手にやって大丈夫かしら……ところでセレスタは？」
「もうシエラと配置についてるぜ。ま、あの騎士サンにしかやれない役目だからな」
戦場の遥か外をちらりと見やるアメリア。
今の彼女たちの戦いは、今後の本番のためのいわば露払いに過ぎない。中枢にいるオルトを倒さない限り、遺跡巨人が吐き出す晶片獣（シャードビースト）たちの第二、第三波はすぐやってくるだろう。
トオルがリルナと共に到着し決戦を開始するまで、それらを迎撃し巨人までのルートを確保しておく必要があるのだ。
「ふぅ……」
やがて、あらかた周囲の晶片獣（シャードビースト）を一掃し、冒険者たちの歓声があちこちで沸き起こる。
だがキリカは、それもあまり耳に入っていないどこか上の空で、戦闘の疲れだけではないため息をついていた。
「その様子じゃキリカ、やっぱ気になってるか？　マスターと、あのリルナって子のこと」
「え⁉」

にやにやしつつ聞くアメリアに、虚を突かれた姫騎士の肩がびくっと跳ねる。
「いや、わかってるわかってる。可愛いし巨乳だしイイ子だもんな～。ありゃ思わぬ強敵ってヤツだぜ」
「きょ……強敵って。確かに橘さんは、ちょっと変わってるけど人間のできた人だけど……」
うんうん、と頷きながら複雑そうなキリカの肩を叩く女戦士。
「第一、マスターと同じ世界の出身だからなぁ。今までそいつはキリカの特権だったわけだけどさ？こりゃいくら愛隷でもうかうかできないよな」
「な、何よ特権って……それなら私と違って、あの頃トオルくんと話した回数は橘さんの方が……お、多かったはずだし。確かその頃からトオルっちとか呼んでたから、もっと昔から接点……あったのかもだし……」
口にしているうちに色々と変な想像を働かせて不安になったのか、黒髪の先を指でいじりつつ挙動不審に目を泳がせるキリカ。
アメリアはそんなわかりやすい反応を見て内心苦笑しつつ、
「ま、でも今は夢界仙境とやらを使って魔隷の術式を成立させるだけなんだろ？　マスターがいつものスケベ心で手ぇ出すとしても、もっと後のことだろうさ」
「……どうもそうは思えないのよね」
「え？」
キリカは一種の確信めいた予感を胸に、ジト目で空を睨んだ。
「なんだかイヤな予感がするのよ。それに、トオルくんは『そういうチャンス』を絶対に逃さない

ような気がして――――！」

※　※　※

「っあ……！」

繋げた机の上に半脱ぎのわがままボディを仰向けに乗せ、健康的にすらりと伸びる両足をいよいよ開くと、リルナはせつなそうな声をあげた。

いつも快活で元気いっぱいのギャルが出すとは思えない、乙女っぽい声。なんというか余計興奮する。

「と、トオルっち……ほ、ほんとに……しちゃうの？」

はだけたブラウスからこぼれる白い双乳、めくれあがったスカートから太ももの奥にのぞくライトピンクのパンティー。

手で口元を隠すようにしてうつむき加減に俺を見上げ、目をうるませてかすかに震えるリルナの真っ赤に染まった顔。

この状況でガマンを貫ける男などいるわけがない。

「ああ。言った通り、隷属術式を成立させるには俺と君が深く繋がる必要がある」

「そ、そっか……そだよね。それなら、やんなきゃだよねっ……街のヒトたち、助けらんないもんね……っ」

いい子すぎるリルナを騙していることに、ちくりと胸が痛む。

だが、俺のオスとしての部分は今さら止まれない。はちきれんばかりに勃起したモノを、ぼろんと外に出す。

「ひゃあわっ⁉」
ギンギンに反り返るチンポを見て、素っ頓狂な奇声をあげるギャル勇者様。
期待はしてたが、このウブな反応ときたら……外見とのギャップがやはりたまらない。
「そんなにびっくりした？　大きすぎるってことはないと思うけど」
「いやいやいやだって、サイズの平均とかアタシわかんないしっ！　そ、そもそも大きさとかじゃなくてっ……そのじょーたいが、初めて見るっていうかぁ……うひゃあぁ……！」
それでも興味は人並みにあるらしく、慌てて顔を隠した指の隙間からちらりと熱い視線を送ってきてるのがわかる。
あ、チンポに力入れて急に動かしてやったらビクッてなった。いちいち反応可愛いぞ。
「大丈夫。優しくするから安心して、橘さん」
「あ……う、うん、よろしくお願いします……って、やぁぁあっ⁉　なっ、なにパンツいきなり脱がしてきてんのトオルっちぃぃっ⁉」
「いやだって、そりゃ脱がさなきゃこれ、挿入れられないでしょ？」
手早く邪魔な布を取り去ると（ちなみに、その方がエロいから片足に引っかかるように半脱ぎだ）、透明な糸を引くくらいリルナのあそこはすでに濡れまくっていた。
胸いじりでイカせただけでこんなになるとはな……予想以上の感度で期待が持てる。
ふるふると震えるシミひとつないサーモンピンクの割れ目、体質なのかほとんど生えてない毛。
ギャル勇者の秘密の場所は、意外と幼い印象を受ける綺麗なものだった――――ズリネタにした男たちの中で、俺だけがこの眺めに到達したという感慨にしばしふける。

「じゃあいくよ、橘さん」
「ちょ、ちょい待っ……まって！　まってぇ！　トオルっち、こ……これっ！　これつけて！」
「え？」
ずびしッ！　という勢いで、リルナは俺の眼前めがけ両手で何かを突き出した。
その、平べったく畳まれた薄ピンクの物体は……コンドーム。
「うお、どっからこんなモノが⁉」
「し、知らない。出てこいって思ったらなんか手に握ってた……」
今いる放課後の教室同様、夢界仙境の力で俺たちのイメージが実体化した産物ってわけか。
「というか、使ったことあったの？」
「ないに決まってんじゃん⁉　でもさ、こーゆーことするときは……つ、つけなきゃダメだよ。おばーちゃんがそう言ってたもん……で、できたら困るもん……あ……赤ちゃん」
そもそもここは夢界、寸分違わぬ感触や実在感とはいえ非物質的な世界だ。
精神と精神を介した隷属術式は成立しても、さすがに妊娠までするとは思えない。
だがリルナはそこまで思い至らないほどテンパっているのか、あるいはわかっていてもなお気になるのか……いずれにせよ、思った以上に貞操観念がしっかりしているようだ。
「……わかったよ、橘さん」
少し考えた末、俺はにっこり笑って頷いた。
「あ、ありがと……」
「いやいや、気にしないで。うん、大事だよね、こういうことはさ」

そう――俺は気付いたのだ。
考えてみれば、異世界でコンドームを使うチャンスなど基本こういう場所でもなければ存在しないだろう。
そしてリルナはギャル。中身はウブでも外見はギャルギャルしいギャル。
ギャルとコンドーム！　これほどまでに相性よくエロい小道具の組み合わせが他にあろうか、いやない！
現に、ちょっと涙目笑顔でゴムを持った赤面リルナを見ているだけで、俺のチンポはさらに熱く硬く反り返っていくではないか！
「てなわけで――それを着けてくれ、橘さん」
「……へ？」
満面笑顔で口にした俺に、理解不能のハテナマークを浮かべるリルナ　ｗｉｔｈ　コンドーム。
うん、やっぱりわからないよな。
「俺のチンポに、そのコンドームを装着してくれってことだよ。君が」
「えっ⁉　と、トオルっちが自分でつけるモンじゃない……の？」
「いやいや、女の子が男に着けてあげるんだ。そういう作法なんで」
「作法っっ⁉　マジで⁉」
うわぁ知らなかった――と、愕然とショックを受けた様子でゴムと勃起チンポとを交互に見つめるリルナ。
まあ、ウソ八百なんだからそりゃ知らんわな。

「大丈夫、着け方は俺が指示してあげるから。まず……ゴムをそう、そっち向きにして、形を崩さないまま唇で縦にくわえるんだ」
「う、うん、えっとこっち向きで……くちっ――――唇ぅぅ!?」
「何か問題でも？　手ですると爪で破れる危険性があるからね。ほら、橘さんの爪綺麗だけどちょっと長いし」
「たっ確かに……うわー、そんななんだ……ホントにみんな、こんなんやってるんだ……！」
多少は真実が混ざっているが、そもそも夢界でゴムをつける根本的な必要性がないということは黙っておく。
ともあれ勢いで言いくるめられたリルナは、ピンクのグロスでうっすら光るキュートな唇に避妊ゴムをこわごわホールドすると……突き出された俺の股間に、おそるおそる近付けていく。
「いいぞ、そのまま……うっ、おおっ……！」
間近で見る男性器の威容に目を半ばつぶりながら、おっかなびっくり突き出された唇が亀頭に達した。
要領のいいリルナは言葉少なな指示でもすぐメカニズムを察したようで、密着させたゴムがくるくると巻き開くように、チンポを唇の奥めがけ沈めていく。
サイドテールを揺らして、せつなそうな赤面顔で――――ゴムフェラに等しい、処女ギャルがやるにはエロすぎる卑猥な行為だ。
柔らかいリップがゴム越しに触れる感触がなんとも心地よい。
「んっ、ぷぁ……！　で、できた、かな？」

「ああ、上手いぞ橘さん。ちゃんとフル勃起チンポにスケベゴムを着せられたな」
「ちょっ、なんかムダにエロい言い方してないっ!? そ、そーゆーのオヤジくさいよトオルっち……ふ、ふぁ!?」
よしよしと股間から見上げてくる頭を撫でてやると、なついた大型犬みたいな可愛い反応が返ってきた。
そんな顔のすぐ前に、どぎつい蛍光ピンクのコンドームがかぶさった俺のチンポがあるという光景がまた興奮必至だ。記念撮影しときたいくらいだな。
ともあれこれ以上、俺もコイツもお預けを耐えられそうにない。
「じゃああらためて――今度こそいくよ、橘さん」
「あっ……！ 熱っ、ご、ゴム越しでもトオルっちが熱くなってんの、わかっ……るぅ……っ！」
にゅる、にゅりりっと蛍光ゴムに覆われた亀頭を淫唇にこすりつけて直接愛液をまぶすと。
俺はついに、同級生の男どもの誰もがキリカ同様に憧れたクラスの裏アイドル、その未経験処女マ〇コめがけて――いきりたったチンポをゆっくりと侵入させた！
「はっ、んはっあっ――あぁあっ、あっ入っっ……やっ、マジで入っ……ちゃうぅぅぅうっっっ!!?」
ぬぷ、ぬぷぷっ……つぷぷっ、ぷちゅっ――にゅとぷんっ！
「くっ……うはっ、おぉぉ……っ！」
いつも格闘戦で激しく運動しているせいか、処女膜の抵抗も、おそらくは痛みも最小限のものだった。

狭く、ところどころコリッとみずみずしいギャル肉穴は、たっぷりにじみ出た愛液のおかげか俺の侵入を予想以上の素直さで受け入れてゆく。
何度味わってもたまらない、ひとりの少女を自分の手でオンナにする征服の実感が、みっちりとチンポの全周囲に跳ね返ってくる。
「はぁ、うぁあっ⁉　と、トオルっちが、アタシのナカにいるのっ……わ、わかるぅぅ……っ！すご、アタシのあそこっ、ぎゅうって広げられちゃってるよぉぉ……！」
大丈夫そうではあるが、一旦挿入を止めリルナの反応を見る。
はっはっと短く息を荒らげ、両腕で自分の体をぎゅっと抱きしめるようにして、初めての異物感を戸惑いつつ受け止めているようだ。
結合部に視線を落とすと、コンドームと愛液で照り光るチンポの根元半分がギャルマ〇コから生えているなんともイヤらしい光景。
「このままいけそうか、橘さん？」
「うんっ、た、たぶんだいじょぶ……！　でも、あのねトオルっち、ふたつ、お願いっ……いいかな？」
何？　と聞き返そうとした俺の頭部めがけ、だしぬけに上体を起こしたリルナが迫ってきた。
胸板にむんにゅり押し当てられる巨乳。
こっちの首筋に手を回して、恥ずかしいのか耳元でそっと答えがささやかれる。
「ひとつ……手、ぎゅってしてて。そんで、もひとつはね――名前で、呼んで」
「……っ！　わかった……リルナ」

チンポから膣内の温かみを、密着した胸からドキドキと高鳴る心音を感じながら、真っ赤な耳たぶにその名を告げる。
瞬間、ぶるるっと嬉しそうにリルナのすべてが震えた。
「……てへへ。あのね、実は昔からずっとね。そう呼ばれてみたかったんだぁ」
こつん、と額同士を当ててはにかむギャル勇者。
やばい……可愛い。
外見と仕草にギャップがあるだけになおのこと強烈な可愛さだ。
あらためてそっと上体を横たえると、優しく押さえつけるようにして両手を恋人繋ぎに結ぶ。
「ぁ……いい、よ。アタシの一番奥まで、来て……っ！」
せつなそうにうるんだ瞳。机の上にふぁさっと広がったサイドテールとスカート。
言われるまでもなく、俺の下半身は燃えたぎる熱に浮かされていた。それはおそらくリルナも同じ。
「ああ、いくぞリルナっ！」
「んっうぁあっっ⁉　ああっ、おっ奥まで入ってくるぅぅぅ……ッッッ⁉　はふぁ、はぁぁぁあっあっっ⁉」
まだ硬さを残した膣道をミチミチかき分け、誰にも許したことのない体の真芯めがけゆっくりと、だが着実に肉槍を突き込む。
こつんっ……と子宮口に先端が当たる感触が返った瞬間、リルナは細い腰を浮かせて声にならない声でわなないた。

どうやら、この刺激だけで軽イキしたようだ。期待以上の感度と言うほかない。
そのまま丁寧にほぐすように、二、三回のストローク。
「んぅっ、はぅぅあっ……あっんあっっ⁉　ひゃぅうっ……んひゃんっっ⁉　ふぁあぁ⁉」
「くっ……リルナ、このペースでつらくないか？」
「えへへっ、トオルっち、やっぱ優しいねっ……でもっ、あ、アタシはだいじょーぶ、だからっ……好きに動かして、いいからっ……ね？」
長いまつげをかすかに涙で濡らしながらも、健気にそう言ってくる。
その健気さを前にして、俺の胸を再び罪悪感が貫いた。
こんないい子を、騙してセックスに持ち込んでいるというのに……優しいなどと言われる資格はないのに。
「……違うんだ、リルナ。聞いてくれ、俺は実は君を……！」
「ううん、いいの。そのコトならっ……アタシもおあいこ、だからっ……！」
「え――――？」
ずっぷり根元までの挿入を受け入れたまま、リルナは微笑んだ。
あの、太陽のような満面の笑顔で。
「あのね、途中から、なんとなくわかっちゃってた、よっ……！　トオルっち、たぶんホントはアタシとえっち、したいだけなのかも……って」
「‼　じゃあ、なんで……」
ならばなぜ、術式の完成に必要なわけでもないセックスを受け入れたのかと。

思わず聞き返した俺を、悪戯っぽい笑みで迎え撃つと。
「あはっ、トオルっちでも、わかんないことあるんだねぇ……じゃあ、おしえたげる」
リルナは悪戯っぽく笑い、告げた。
とびっきりの秘密を告白するように。
「アタシも……きょーみあったから、だよ。トオルっちと――――しちゃうコトに」
「っっ!!」
それは、この行為が始まってから、終始俺のペースに引きずられていたかに見えたリルナからのとびっきりの不意打ちだった。
まさに一発逆転、勇者の一撃。
「ううん、それだけじゃないね……ほんとは、やっぱ不安だったんだと思う……オルトと戦うのが、もう一度話すのが……だから、あの時みたいにトオルっちに勇気、もらいたかったの……こうして抱きしめて、大丈夫だよって感じさせてほしかったんだと、思う……っ」
仮にも相棒として信じてきた存在に見放されたことは、やはり一人の少女に深い傷を刻んでいた。
それが異世界に来てから……いや、あの日俺の言葉をきっかけに自分を変えてから、ずっと健気に、一見天真爛漫に、前向きに世界と戦い続けてきた彼女の中にずっと封じ込められてきた弱さを呼び起こしたのだ。
こうでもしないと、リルナはそれを自分以外には見せられなかったのだろう。
「だからね……気付いてないフリ、しちゃった。騙されてるフリ……へへ、どうしよ。今日はトオルっちにいっぱい、アタシの秘密にしてたコト……知られちゃったね」

だからおあいこ、ウソをついていたのはお互いさまだと。
だから罪悪感を覚えることなく自分の体を味わってほしいと……いや、お互いに感じ合おうと。
そうリルナが言っているのだと理解した時。
ぷちんと、俺の中で何かが切れた。
「リルナ……リルナぁっ！」
「ひゃぁああッッ⁉　ちょっやぁっ、きゅっ急に動いっ……えっえっ、しかもさっきより大きくっ……んふぁぁぁああんぁあっっ⁉」
湧き上がる愛しさと情欲が、今度こそ俺の心と体のストッパーを取り払っていた。
今までになくビキビキとみなぎるチンポで繰り返し繰り返し、未熟なギャル膣肉を耕すかのごとくこすりあげ、イヤらしい水音をズチュズチュと鳴らす。
不安など消し飛ばしてやるとばかりに、腰を叩き付ける。
「あぁぁスゴっ、これヤバっっ、ひゃふぅぅぅんっっ⁉　こすられてるぅうっっ、トオルっちのカタくてアツいのでアタシのなかッッ中ぁぁぁあ‼　け、削られちゃってるみたいだよぉぉっっ⁉」
容赦ないピストンをしっかりと健気に受け止め、可愛らしいあえぎ声と精一杯の受け腰で応えようとするリルナがなお愛おしい。
ドッドッドッッと打ち込まれる腰の動きが机をギシギシ鳴らすたび、ぶるっっばるんッと大迫力の生巨乳が半脱ぎのブラウスからあふれ踊る。
「んひゃうぅうッッ、はぅぅうっっ⁉　とっトオルっち、アタシのカラダっ……ちゃんとトオルっちのことキモチよくできてるぅっ⁉」

「ああ、すごいぞリルナっ！　ぎゅうぎゅうにゴムごとチンポ締め付けてっ、がっちりくわえこんで濡らしまくってっ……ひと突きごとにマ〇コ肉が柔らかく溶けてなじんでくみたいだっ！」
持ち主同様の柔軟さと適応力で、まるで肉棒を型取りするがごとく最適化されてゆく最高級霜降り処女ヒダ肉。
きゅっ、きゅんっと無意識に収縮するランダムな刺激も予想外のスパイスとなって、的確に俺の快楽中枢を刺激してくるこの贅沢さ……気持ちよくないわけがない。
それどころか、油断すると暴発してしまいかねないほどだ。
「ッは！　っっふぁああ!!　はんっっ、ぁふぁぁんッッ!?　ヤバ、こんなキモチいいんだっっ、スゴいんだっ、セックスってぇぇっ……んぉぉうっっ!!?」
ぐりゅんっっ、と内壁のお腹側をエグい角度でえぐったチンポ先が性感帯の弱点にヒットしたらしく、リルナがひときわ発情したあえぎを漏らす。
すかさず俺は白い太ももを抱え、その箇所を何度も突き崩すような角度でストローク攻勢をかける……こういう時は経験値の差がモノをいう。
「ここがギャルマ〇コの弱点かっ、リルナぁ！　たっぷりイジめて今まで出したことのないメス声あげさせてやるぞっ、そらそらそらぁっ!!」
「ほへっっ、あぅぅッんほぉぉぉっっ!!!　やっちょっっ、まっ待ってヤバっっこれマジでやばいっ……てぇぇぇんッッッ!!!　んぉぉ、あひっっひぎぃぃうぅ〜〜〜〜〜っっ!!!」
俺のピストンによって強制的に、乱れた品のない嬌声をあげさせられるリルナ。
ガン突きする腰の動きに合わせてそれはどんどん高まり、かつてない絶頂の高みへとみるみる近

付いてゆく。
「んぁっんあぁぁあっっ!?　これっ、これさっきのっ！　さっきよりスゴいのキちゃうよぉおお!!?　あひっんひゃぁぁぁあ!!?」
「いいぞっ、さあイケっ！　俺も一緒にイクっ……からっ！　イけっっ、リルナぁぁあ!!」
「トオルっちっ、トオルっちぃいいっっ!!?　うんっ、うんっ一緒にいこっ!?　アタシとっ、あはぁぁあうっっっ!!」
覆い被さる俺の背中に必死で手を回し、足まで自分から絡めて、体幹を駆け上がる快感電流に揉まれ押し流されてゆくギャル勇者。
俺も自由になった手でずっしり巨乳をもみくちゃに鷲掴み、あるいはプリンっと引き締まったお尻を掴んで、なおもガンガン腰を叩き付ける。
そして絡み合う男と女の悦びが――――混じり合い溶け合い、ついに頂点へと登り詰めた。
「あっヤバっイクっっ、いくいくイッちゃうぅっっ……んはぁぁうっっはぁぁぁぁうぅぅぅぅぅぅぅぅあ～～～～～～～っっっ!!?」
「おおおッッ、うおっ締まッ……くぅぅぅっっっ!!　だっ射精すぞリルナぁっっ!!　うおおッッくはぁぁっっ!!」
どぶびゅるっっ……びゅるるるんっっっ!!
っどぶ、どぷぷっっ……びゅば、ぶぱっ……びゅくんっっ!!　びゅぷぷぅぅっっ!!
「っっ熱ぅう!?　あぁ～～っっ来てるっ、ナカで熱いのっ爆発してるよぉぉぉお!!?　びゅーって、びゅ～ってゴム膨らんでっ、んぁあっはぁぁ……ふぁぁあっ……あっあ……っ！」

何度も何度も、波のように重なって訪れる絶頂感にリルナの可愛い顔はすっかりトロけ、俺が大量放精をぶっ放すのに合わせてビクビクと膣内(なか)を波打たせる。
元気いっぱい好奇心いっぱいに搾り取ってくる側面と、繊細かつ従順に包み込む大和撫子な側面が同居する、リルナの純情処女ギャルマ〇コ。
キリカのエロくて優等生なマ〇コとはまた違う味わいの、魅力あふれる食べ心地に射精がなかなか止まらない。
「っく……し、搾られたっ……！　ふぅぅ……落ち着いたか、リルナ？」
「え、あっ、うんっ……やば、アタシちょっと意識、トんでたかもっ……うう、すごすぎだよ、トオルっちぃ……っ！」
涙目で俺を見上げるリルナの表情には、一種の尊敬の色があった。
男の自尊心を満たされ、悪い気はしない。
「じゃあこれ、抜くからな」
「んぁっ、うんっ……うぁ、ズルって抜けっ……あう、こ、これヘンなかんっ……じっ……はぅん⁉」
根元を指で押さえつつ、ゆっくり引き抜かれたチンポ。
かぶさっていたモノを手早く外すと、愛液にぬらぬら光るピンクのコンドームは、小さな水風船のようにとっぷり精液で膨らんでいた。
「ほら、見て。こんなに出た」
「う、うわぁ……！　こ、これぜんぶ……せーえき？　こんないっぱい出るんだ……」

「ああ、リルナがあそこで搾り取った俺の精液だ」
「あ、あう……だ、だからそーゆうスケベオヤジっぽい言い方やめてよぉ……！」
たぷたぷ揺れる重そうな使用済みゴムから慌てて目をそらし、汗まみれの顔を赤らめる反応が可愛い。
「いやいや、本当にオヤジっぽいセリフってのはこんなもんじゃないぞ。たとえば――」
ごにょごにょと耳打ちすると、リルナの顔が今までにないほど真っ赤に茹で上がり、わなわなと震えた。
「と、トオルっち、それ……まさかアタシにマジで言ってほしいん？」
「うん、まあ、できればかなり」
「う～～～～～!!? へ、変態だぁ……変態がいるよぉ……！」
しばらくさまざまな方向に視線を泳がせて逡巡していたが、ついには根負けしてちょっと引きつった笑顔をつくり。
「こ……この濃ゆいのがアタシの処女マンでめちゃシコ搾り取っちゃった、トオルっちのあつあつプリプリせーえきで～すっ♪　いぇい、ぴーすっ♥」
顔の横に戦利品のように掲げ吊るした膨らみコンドーム、精液でぱんぱんになったそれをピンクの舌先でちろちろイヤらしく舐めながらのVサイン。
おお……これだ、やはりセックス後の着崩れたギャルにしてほしいリアクションはこういうアレだ！
「――って何ゆわせるんっ、もぉおお!!　ばかばかばか変態ぃぃ!!」

うつむいて表情を隠しつつ、ぽかぽか叩いてくるリルナ。
笑って受け流す俺だが、そのうちなんと手にしたコンドームまでべちべち叩き付け始めた。
「ちょっ、やめ、中身がこぼれるっ！　顔にかかるっ⁉」
「ジゴージトクだよ、トオルっち！　むしろかかっちゃえ！　えいえいっ……あはっ、あははっ！」
「くくっ……ふふふっ！」
行為の汗にまみれた互いの体にもたれかかり、ひとしきり変なテンションで笑い合う。
ふと、濡れた視線が交錯し、示し合わせたように無言が訪れる。
やがて、どちらからともなく、俺たちの唇が重なり――――。
「んっ……えへへ。これで、アタシはトオルっちの魔隷……だよ」
柔らかでみずみずしい感触の中。
俺と勇者リルナとの間で隷属術式の契約が、ついになされたのだった。

※　※　※

「危ねぇッ！　キリカッ‼」
「え――――」
だしぬけに天より飛来した何かが、アメリアがとっさにかざした盾の表面で炸裂した。
ほぼ同時に、降り注いだ同様の攻撃が周囲の地面や瓦礫に次々と着弾し、いくつもの小爆発を巻き起こす。
「ッ痛ぇぇっ！　いったい何だってんだ⁉」

「晶片獣（シャードビースト）の新手（あらて）っ⁉　でも、こんな攻撃をしてくるヤツなんて今まで……！」
天を見上げた美少女たちが、一斉に息を呑む。
逆光の中、悠然と浮遊するひとつの人影がそこにあった。
「あれは――――⁉」
すらりと流麗な、だが女性らしく局所的に突き出たフォルムにフィットした、白いボディスーツ。
身体各部にポイントアーマーのように存在するメカニカルな金属パーツ。
その背には浮遊する二対の翼にも似た、大剣のようにも銃砲のようにも見える長大な機械兵装。
エメラルドを溶かしたかのごとく輝く、非人間的な光沢色の長髪がなびく。
両目部分を覆うバイザー状パーツの細いスリットから、ぎらりと紅い光が漏れた。
〈アールマ・ヴァルキュリア・Ⅶ――――これより、敵性有機生命を殲滅する〉
オルトとそっくりの抑揚に欠けた声で宣言する、白銀の戦乙女。
その胸元には……ナナの中枢コア、あの真紅の宝石がはめこまれていた。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富 1-3-7 ヨドコウビル
TEL.03-3555-3431(販売)／FAX.03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、
ホームページ上に転載することを禁止します。
本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。
また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

http://ktcom.jp/